



②

「遊ぼうー!」

雨の子チャプとお日さまの子サータ、風の子フーがいつものように、遊びにやっけてきて言いました。でも、みんななんか変です。

「何かあったの?」
と、サータが聞くと
「最低なこと。」

「こんなに暑いのにプール中止だってさ。」
と大ちゃんが言うと、

「雨が降らないから、水不足なんだって。」
とみずきが説明しました。

サータとフーは、チャプを同時に見ました。

「チャプ、チャプの力でどうにかならないの?」

とサータが言うと、チャプは、

「おれはさ、子どもだから、

シャワーぐらいの雨しか降らせられないんだよ。」
と、なみだ声になって言いました。



3

サータが、

「チャプのおじいさんとおばあさんの

チャプジーとチャプバーって、

すごい雨の力を持っているって

お日さまに聞いたことがあるよ。

頼んでみたらどうかなあ。」

というと、フーも

「ぼくの風でチャプを送ってあげるからさ。」

と励ましたので、

チャプは涙をげんこつでこすりあげ、

顔を上げました。

「たのんで、たのんで。」

と、みずきが言つと

「一生のお願い、プールに入れさせて!」

と、大ちゃんが 大げさに両手を合わせて

拜んでいます。

「雨を降らせてくれたら毎日遊ぶからさ。」

と、真ちゃん。



④

ついにチャプが、

「遠い山の方の川にすんでいるらしいけど、

そんなに困っているんなら。」

と言いながら、握りこぶしを作りました。

お日様の子サータが光をあてると、

青い帽子のチャプは、姿が見えなくなりました。

水蒸気になったのです。

フーがふく風と共に、

チャプの水蒸気は 空高く昇っていきました。

昇るにつれ、体が冷えてきて、

水の粒に変わり、さらに冷えると氷の粒になり、

大きな雲の仲間になりました。

チャプの雲は、フーの風に乗って、

チャプジー、チャプバーのいる

山の方にやってきました。



5

そこで、チャプは雨となって降り注ぎ、
とうとう川につきました。

フーが大きく手を振って去っていくのが見えます。
チャプは心細くて、ブルブルッと体をふるわせました。

「チャプジ〜 チャプバ〜 どこにいるの〜」
田んぼの隅の方から、顔を出した者がいます。

「おれはナマズのジャイアントヒゲだ〜」

チャプジーとチャプバーは、行ったばかりだ。

銀色の帽子をかぶってな〜」

すると、すぐそばから、顔を出しては潜り、
また出して何か言っている者がいます。

「僕は、ドジョウのヌルヌルッ」

ジーたちは、ここでいつも遊んでいた

ピンク帽子の 雨の子ランちゃんが

ゲリラ豪雨にさらわれたので、

助けようと思ったのさ。」

「おれは、チャプジー、チャプバーの孫のチャプです。

助けてもらいたくて 会いに来たんです。

教えてくれてありがとう。」

チャプは、流れに飛び込みました。



6

一人ぼっちのチャプの冒険が始まりました。

間もなく、ゴーという音が聞こえました。

目の前の流れが、急に切れてチャプは、

真っ逆さまに何十メートルも落とされました。

滝つぼです。

そこに、ピンク帽子が 何かの口から

出たり入ったり 繰り返しているのが見えました。

イワナのクチデカデカです。

「アッ、ピンク帽子はランチちゃんだ。

クチデカデカにやられている。」

チャプは、全力でクチデカデカの大きな口に

落ちてきた葉っぱを押し込みました。

すると、葉っぱを食べ物と思ったクチデカデカが、

ランチちゃんを吐き出しました。



⑦

「ランちゃん、

おれ、チャプジー・チャプバーの孫のチャプ。
早く、下流ににげよう。」

「チャプ、助けてくれてありがとう。」
やっと、そう言ったランちゃんは、
チャプにつかまって、滝つぼから脱出しました。

流れの早い岸边に、小さな水車が勢い良く回り、
そばにサラサラ川水力発電所と書いた
建物がありました。

「水って、電気も作れるんだね。」
とチャプが感心して言うと、
ランちゃんは

「チャプジーが、水で電気を作れば、
二酸化炭素を出さないから

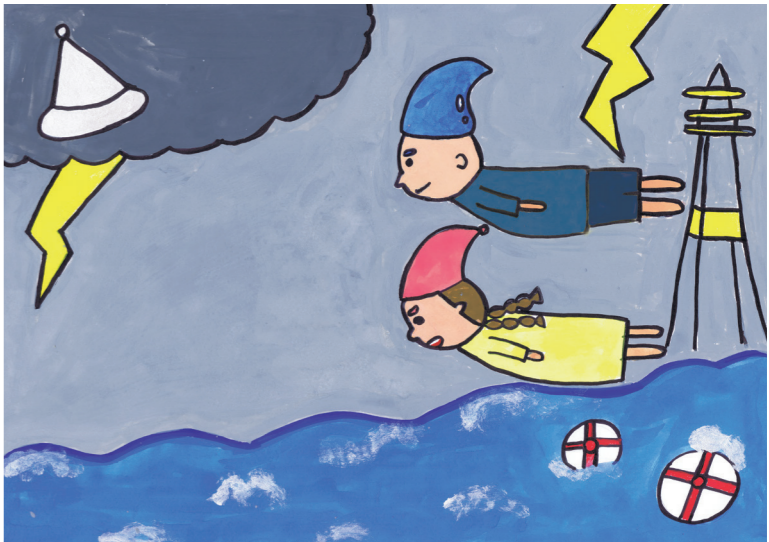
地球は熱くならないし、空気も汚さないって。
水はずっとなくならないからいいって。」

といたので、チャプは水の力って、
すごいんだとびっくりしました。



8

ふと見上げると、空に黒雲が広がっています。
おまけに雷が光っています。
すると、黒と金色のうずに乗った
雷の子ピカピカドンタが現れました。
ドンタは、空と地上を結ぶ稲光の橋を
一瞬でつくりました。
あっという間に、
空に巻き上げられていく者がいます。
「銀色の帽子が見える！」
「チャプジー、チャプバー、まってくれ〜。」
チャプの声に、
雷の子ピカピカドンタは
「ここまでおいで、弱虫毛虫。
はさんですすてろー！」
とチャプをからかいながら、
ドカーン、ドカーンと足音をさせて
空高く昇っていきました。



9

「おれは仲間に約束したんだ。

だから、ピカピカドンタが何を言っても、

負けずに追いかける。」

「私もチャプに助けってもらったから、

今度はチャプを応援する番。一緒に見つけるわ。」

「ありがとう。ジーたち喜ぶだろうなあ。」

そう言いながら、二人は海へと流れていきました。

海面に波で発電して光り、

船に位置を教えるブイが 波踊りを踊っています。

空から、強い風に交じって

雨つぶがふきつけてきます。

「アッ、あそこに銀色の帽子が見える。」

ランちゃんが、黒雲を指さしました。

「チャプジーとチャプバーだ。待ってくれ。」

チャプは、ついに決断しました。

「よし、風に乗って、空へ昇るぞ。」

チャプとランは、わずかな光に反応して、

あっという間に水蒸気になって空へ昇りました。



10

「巨大台風だ。渦の中に巻き込まれていく。」
チャプとランは、あたりを見渡すと、
チャプジーとチャプバーの帽子が、
渦の中を回っているのを見つけました。
そばに、ピカピカドンタが二人を見張っています。
雨の力を持つ二人に、
雨を降らせようとしているようです。

地球が自分で回る自転の力で、
この辺の風は、西から東へ向かって吹くので、
台風もどんどん西から東へ向かいました。
陸に上がった巨大台風は、山々にぶつかり、
うずの勢いも、あつという間に
ビュードロドロとよわまっています。



11

ジェット気流に飛ばされて、
チャプジーたちの雲が チャプたちの雲と
いっしょになってしまいました。
見ると、目の前にチャプジーとチャプバーが
いるではありませんか。

ピカピカドンタは、暴れすぎて疲れきり、
ひっくりかえっています。

「チャプジー、チャプバー、孫のチャプです。
おれの住んでいるところは、飲み水も不足して、
お風呂もプールも入れなくなりました。

ドンドコダムの方で、雨を降らせてください。
ピカピカドンタさうん。

一緒に来て雷を鳴らしてください。」

「何なに、雷を鳴らしてくれって。
やってやるともさう。さあ、行こう。」

ピカピカドンタが大喜びして立ち上がると

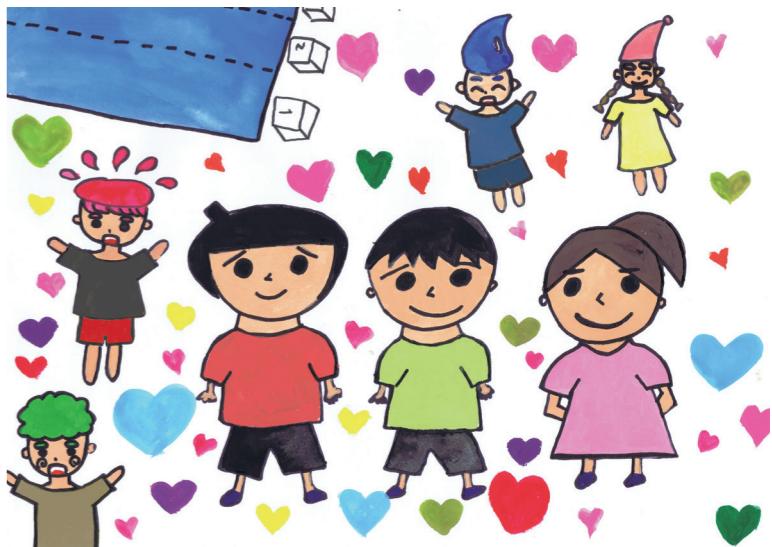
「私たちの孫が、町の人のために、

勇気を出してここまで来たとは、驚きだわい。」
チャプジーとチャプバーはうなずき合って、
ドンドコダムの方へ向かいました。



12

ダム of 近くにやってきたピカピカドンタは
ドンガラドンガラ、好きただけ雷を落とし、
チャプジーとチャプバーは、
山々やダムにしっかり雨を降らせました。
チャプジー、チャプバーはお日様の言う通り、
ゲリラ豪雨と違って、雨の天才でした。
そして、豊かになった水のおかげで、
町々に、川が水を運んでいきました。
地下水もたっぷりたまりました。
川岸にある水車では、
勢いのいい水力で発電をして、
電気をたっぷり村の家々に送っていきました。



13

ようやく町にもどったチャプは、
ランちゃんを連れて、
みんなのところへ行きました。

「チャプ！ 明日からプール再開だって。」
と大ちゃんがピョンピョンしながら言つと、
「お風呂も入れるって。チャプのおかげね。」
とみずきが心から感謝してチャプを見ました。

「チャプ、友達が出来たんだ。すごいなー。」
サータとフリーが感心しています。

「チャプ。どうやって、帰ってこられたの？」
真ちゃんはワクワクしてチャプを見えています。
チャプは、初めて胸を張りこついいました。

「水はどんどん姿を変えて移動できるから、
戻ってこられたんだ。」

水は電気もつくっていたよ。」
七人になったなかよしは、
真っ青な波がたつプールを見て、
手をつないで、飛び上がりましたとさ。

《めでたしめでたし》



①

創作童話 『水となかよし 雨の子チャプの決意』

「明日から、プール中止だって〜」
と、大ちゃんが息を切らして
なかよしのところに向けこんできました。
先生が廊下で話しているのを聞いて、
急いで帰ってきたのです。
「ヒエー、そんなのありがよ。」
真ちゃんが驚いて、
眼鏡をおさえながら、言いました。
「やっぱりね。」
お父さんが、この街の水ガメのドンドコダムに、
冬、雪が降らなかつたり、
雨も降らなかつたりで、
水が半分以下になつたつて、言つてたよ。」
みずきが浮かかない顔で言いました。

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

address : 〒174-0063 東京都板橋区前野町4-8-6

tel & fax : 03-3960-6052

e-mail : info@npo-soe.jp

協力：東京家政大学人文学部教育福祉学科 宮地ゼミ

この紙芝居は、東京ガス環境おうえん基金の助成を受けて、作成しています。